

## M 氏邸訪問記(2019.4.7)

### 1. はじめに

前回の訪問では、M 氏がテクニクスの最上級ターンテーブル SL-1000R を導入された直後の訪問でした。今回は、その後の進展とアームによって音がどのように変わるかを確認させていただくことが目的で、I 氏とともに訪問することになりました。拙宅の LINN LP12 のアームが 40 年前のもので、アナログと最新デジタルの比較試聴から見えてきたこと(1)とアナログと最新デジタルの比較試聴から見えてきたこと(2)で報告しましたように更新すべきかどうかの参考にさせていただくためです。

### 2. M 氏邸のシステムの概要

前回訪問時には SL-1000R については、純正アームの他、2 本のアームを取りつけられるように仕様を追加され、次のような構成にされていました。

テクニクス純正アーム：MUTEC 神田零→Mysonic Stage1030→Accuphase C270

IKEDA IT407 Long アーム：SPU Royal→Accuphase C270

SME Series 5 アーム：Shure V15 Type5→Accuphase C270



今回は、一部次のように変わっていました。

テクニクス純正アーム：Benzmicro ACE-M→Accuphase C270

さらに、SONY の TTS-8000 には、アームは FR64FX で、Audio-Technica の AT33PTG が取り付けられています。

### 3. M 氏邸のシステムの試聴経過

最初に耳慣らしということで、CD とアナログ盤を替えながら、Shure 以外の三つのカートリッジとアームの組み合わせの音を聴いていきました。シュタルケルのバッハの無伴奏チェロ組曲、ワルターのモツアルトの交響曲 36 番、シプリアン・カツアリス

のベートーベンの6番のピアノ編曲版、アルバン・ベルクのベートーベンの大フーガなど順次聴いていきましたが、Audio-Technica はさっぱり系、Benzmicro は繊細でニュートラル、SPU は中低域に厚みのある重量感のある音です。また、全般的に、以前に比べ、大人しめの聴きやすい音になっており、音楽の細かい表情の再現に長けてきたように感じます。微調整以外には大きな変更はないということでしたが、後で聴くと、PIONEER のリボンツイーターPT-R7III が加わっているということでしたので、そういった効果が現れていたようです。

ここで目的にアームの違いを聴いてみようということになり、カートリッジの Benzmicro をテクニクス純正アームで聴いておいてから、IKEDA IT407 のアームに付け替えることを実施しました。シュタルケルと岩崎淑のチェロソナタ、持参した [モーツァルトのレクイエム](#)、[ヒラリー・ハーンのバッハのV協奏曲](#) を、二つのアームで聴き比べたところ、音質にかなりの差がありました。テクニクス純正アームでは、前述のように Benzmicro の繊細でニュートラルな表現力が好ましく感じられましたが、アームを IKEDA IT407 に付け替えただけで、まるでカートリッジが変わったかのような、どっしりとした安定感のある音に変わります。M氏は、このアームのしっかりした構成が、音に反映されており、大変お気に入りのようですが、テクニクス純正アームの軽やかな繊細感も魅力的で、ある意味、Benzmicro の本来の音を出しているようにも感じられます。これに加えて [エレスタのアクセサリー](#) を使用してみましたが、全体に大人しくなり、騒がしさがなくなります。M氏とI氏は、少しダイナミックな躍動感が後退することが気にかかりようですが、大編成ものでは、細かいニュアンスが分かりやすくなるようです。

さらに、I氏から SACD の音を聴きたいという注文があり、クナッパブッシュのワルキューレの SACD、CD、アナログの比較試聴を行い、I氏は、SACD にはアナログに及ばないまでも、CD とは違う魅力のあることを納得されていました。

その後は、時間まで M氏が準備された音源を聴かせていただき、最初に述べた、スピーカーの効果を再確認できました。

#### 4. まとめ

アームの仕様、構造、材質などが、予想外に大きいことが分り、カートリッジの特性に合わせたアームの選択、あるいはアームに合わせたカートリッジの選択が重要であることが、明確になりました。以上を参考にして、アームの更新、ないしはアナログシステムの構成の見直しを進めていきます。

以上